

遠隔成績を改善する可能性が示唆された。

5) 高度進行・再発食道癌に対する樹状細胞による特異的癌免疫療法

神田 達夫・海部 勉
 劉 莉莉・牧野 成人
 桑原 史郎・西巻 正 (新潟大学)
 畠山 勝義 (外科学第一講座)
 高橋 益廣・鈴木 力 (同 保健学科)

樹状細胞は最も強力な抗原提示細胞であり癌ワクチン療法への応用に期待が高まっている。教室では、食道扁平上皮癌の腫瘍拒絶抗原として久留米大学の伊東らにより同定された SART-1 を標的分子とした樹状細胞ワクチン療法を本学倫理委員会の承認のもと、1999年11月より開始している。現在までに、4例の HLA-A24 陽性の高度進行・再発食道癌症例に対し行い、3例においてプロトコール治療を終了している。この新しい癌ワクチン療法の背景および治療の実際を概説し、現時点における本免疫療法の安全性、臨床効果について報告する。

6) 鼠径ヘルニア手術時に発見された精巣女性化症候群の2例

— 精巣はすぐに摘除すべきか? —

内藤 真一・新田 幸壽 (新潟市民病院)
 荒井 洋志 (小児外科)
 宮川 公子 (同 小児科)

精巣女性化症候群は、染色体が46XY であるにもかかわらず、アンドロゲンレセプターの障害により、男児で精巣が存在しながら外性器が女性形を示し、伴性劣性遺伝をし、成人した後に不妊で診断される以外に、小児期の鼠径ヘルニアの手術時に発見されるものがある。本症に対して、悪性化の問題から除辜術を早期にすべきというものと、精巣から分泌されるエストロゲンの作用による二次性徴の発現する思春期以後まで待つてからにすべきというものと様々な議論がある。

今回、2例を経験し、術後の遺伝相談などでの問題を経験したので、報告する。

7) 一期的腸吻合した壊死性腸炎の2例

深澤 基児・近藤 公男 (太田西ノ内病院)
 大沢 義弘 (小児外科)

今回我々は壊死性腸炎に対し一期的に腸吻合をし、術後経過良好であった2例を経験したので報告する。

【症例1】25週4日、756g、胎児仮死のため緊急帝王切で出生。日齢44に母乳を開始したところ、著明な腹満、

腹部単純 X-p で拡張した腸管、さらに全身状態の増悪を認めたため、日齢48に緊急開腹術施行。回腸末端に一部漿膜が破綻し、impending rupture の所見がみられ、回腸部分切除、回腸回腸端々吻合を施行した。

【症例2】37週2日、2290g、妊娠中毒症のため緊急帝王切開にて他院で出生。日齢1より経口哺乳開始したところ、日齢2に消化管穿孔が疑われ、同日緊急手術を施行。盲腸に5×5mm 大の穿孔を認め回盲部切除、回腸結腸吻合を施行した。

8) 興味ある小児腸閉塞症

毛利 成昭・高野 邦夫
 荒井 洋志・大矢 知昇
 長坂 智・横須賀 哲哉
 芹沢 大・腰塚 浩三 (山梨医科大学)
 多田 祐輔 (第二外科)

後天性に発生したと考えられる小児原発性小腸閉塞の2例を経験したので文献的考察を交えて報告する。

【症例1】5ヶ月、男児。開腹歴なし。VSD、ASD にて根治術を施行。術後2時間30分血便にて発症。全身状態良好で検査上異常を認めなかった。第3病日血液検査の悪化、イレウス像を呈したため開腹した。パウヒン弁から50cm の回腸に強い炎症を伴う癒着性イレウスであった。

【症例2】15歳、女児。開腹歴なし。肋骨原発骨肉腫にて治療終了し外来通院中。腹痛にて発症し近医にてイレウスと診断された。腫瘍の腹腔内再発を否定しきれず開腹した。回腸に限局した線維性皮膜による癒着性イレウスで病理組織学的に悪性所見は認められなかった。

9) ヒルシスプルング病に対する transanal endorectal pull-through を施行した3例

奥山 直樹・山際 岩雄
 大内 孝幸・中嶋 和恵 (山形大学)
 加藤 博久・島崎 靖久 (第二外科)

最近ヒルシスプルング病に対する開腹、腹腔鏡を要しない transanal endorectal pull-through の有用性が報告されている。我々も本症の3例にこの術式を用い、良好な結果が得られたので報告する。

3例はいずれも rectosigmoid type であり、3才、19日、42日で手術を行った。術中迅速標本で、神経節細胞を確認し腸切除を行った。切除腸管の長さは、18cm、12cm、22cm で、手技はいずれも容易であった。いずれも第2病日に経口摂取を開始し、最初の2例では7病日、10病日に退院した。3例目は中枢性低換気症候群を

合併し、術後1か月の現在、人工換気、経管栄養、連日の導気を要しているが、ほぼ良好に経過している。

本術式は低侵襲で、術後の回復が早く、優れた術式と考えられた。

10) 当院小児外科10年間のまとめ

山崎 哲 (鶴岡市立荘内病院) 小児外科
三科 武・鈴木 聡 (同 外科)
二瓶 幸栄・松原 要一 (同 外科)

当院に小児外科が設置されて15年になるが、その症例のまとまった報告は未だ為されていない。今回我々は当院における過去10年間の小児外科症例についてまとめたので報告する。手術件数総数は851例であった。手術総数の32%は緊急手術であり、庄内地方の救急病院としての性格を表していると考えられた。疾患別にみると鼠径ヘルニアが全体の約半数を占めており、23%を占める虫垂炎がこれに次いで多かった。新生児症例は全体の6%で、10年間で手術件数は50件と少ないが、幅広い疾患をアツかつていた。新生児症例としては、肥厚性幽門狭窄症が12例で最多であり、近年になり増加している様子だった。悪性腫瘍は精巣腫瘍のみであり、肝・胆道系の手術は外傷を除き為されてはいなかった。

11) 4ヶ月の保存的治療が奏功した外傷性膵仮性嚢胞の7歳男児例

内藤万砂文・広田 雅行 (長岡赤十字病院) 小児外科

【はじめに】長期間の保存的治療で消失した小児の外傷性膵仮性嚢胞症例を報告する。

【症例】症例は7歳男児。平成11年9月12日、自転車で転倒し腹部打撲。近医で腹腔内出血、高アミラーゼ血症と診断され入院、保存的治療で軽快し9月17日退院す。発熱、腹痛出現し9月24日 CT で径10cm を超える嚢胞指摘、「膵仮性嚢胞」の診断で当科紹介となる。ベッド上安静、禁飲食、高カロリー輸液による栄養管理のもと抗生剤、フサンの投与を行った。腹痛、発熱は約1週間で消失したが、嚢胞の縮小傾向が得られず手術、穿刺等も考慮していたが、10月28日径5cm に縮小がみられ、その後経口摂取開始したがトラブルなく12月11日径2cm となり退院とした。1月21日、CT にて嚢胞の消失が確認された。

12) 小児膵外傷8例の検討

大滝 雅博・岩渕 眞
内山 昌則・八木 実
飯沼 泰史・金田 聡 (新潟大学) 小児外科
新田 幸寿・内藤 真一 (新潟市市民病院) 小児外科
三科 武 (鶴岡市立荘内病院) 外科
山崎 哲 (同 小児外科)

【対象】入院治療を要した膵外傷症例8例に対し、これらの受傷機転、診断経過、治療経過等につき比較検討した。

【結果】①受傷機転は自転車ハンドルによる打撲3例、シーソー関係した打撲2例、自転車との衝突1例、兄弟喧嘩による打撲1例、バスケット練習中仲間との衝突1例であり、何れも心窩部付近を強打していた。②年齢分布は5歳～13歳で平均7歳であった。③性別では男児7例、女児1例であった。④損傷分類はⅡ型(裂傷)6例で、心窩部腫瘍・高アミラーゼ血症およびCT所見にて膵内血腫、膵嚢胞と診断された。何れも保存的治療を基本としたが、内3例が開始後1週間以内に腹膜炎症状を併発し緊急ドレナージ術が施行された。術後ドレーン留置期間はTPN併用(3例中2例)により膵安静を図ったものの、27-40日と長期に及んだ。残り3例は保存的治療で仮性膵嚢胞化したが、縮小傾向を認めず内瘻化手術(嚢胞胃吻合術)を施行した。受傷から手術までの期間は41-82日(平均57日)であった。Ⅲ型(膵管損傷)は2例(7歳男児・13歳男児)で、心窩部や左季肋部に激しい痛みを伴い受傷後45分・17時間て来院、腹部造影CTで膵頭部・尾部の損傷を疑い、各々受傷後1.5時間・28時間で緊急開腹となった。開腹時所見は、十二指腸球部完全断裂を伴う膵頭部完全断裂・膵尾部完全断裂を各々に認めた。前者に対し膵体部胃吻合・十二指腸十二指腸吻合・消化液外瘻造設術を、後者に対し脾合併膵尾部切除を各々施行した。

【まとめ】膵外傷8例の治療経験から以下の結論を得た。①何れも受傷時に上腹部強打されていた。②膵外傷の質的診断には造影CT検査が有用である。③Ⅰ型(膵挫傷)では保存的治療を優先するが、経過観察中に腹膜炎症状を呈した場合には緊急ドレナージ術の適応となった。④ドレナージに際し、不十分なドレナージとされない様、膵全体を十分に検索してからドレナージすべきである。⑤小児の膵頭部断裂例では、膵管の修復は困難であり胃・小腸との吻合による内瘻化および消化液の外瘻化を行い、可及的に臓器温存に努めるべきである。